

# 火星

平成二十三年三月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

雨つぶを萬と湛ふる一の西

探梅や青丹いろなる沼に出で

受験子の真夜の嗽を聞きゐたり

余寒に首だして釣鐘饅頭屋

腰痛の足下ものの芽びつしりと

春の雪降るよカルメを焼きくれよ

まさをなる夜空ありける挿茨

三人といふあぶなさに緋桃咲く

山手町一番地なる鳥の恋

鴨たちの水につづける野に遊ぶ

# 平成三十二年度火星賞作品自選二十句

蘭定かず子

木菟鳴くや寸胴鍋に水張られ  
蓮枯れてゐる明るさを歩みけり  
初みくじ人を離れて開きけり  
水平に七草籠を受けとりぬ  
歩み板鳴らし島より春着の子  
遠足の子に極彩の閻魔さま  
紅梅へゆく虫柱はらひけり  
波寄するたび夏蝶の眩みけり



わだつみは波を絶やさず更衣  
かがまりし人に土筆の殖えぬたり  
糸伸ばしきし蜘蛛の子の草のいろ  
失職の指に渡らせ天道虫  
ゆつくりと島の老いゆく梅雨の月  
神棚を上げ築番の日数かな  
藪漕ぎに夏うぐひすのついてくる  
日傘傾け浅沓を通してけり  
狛犬に秋の日傘の落ち合へる  
寄合の月夜を帰る落し水  
鹿垣に沿ふ水音の晴れわたり  
それからの月の衰ふ蔓たぐり

# 太白星

柳生千枝子

夕映えにかくも魅せられゐて寒し  
映像にピント合はせる雪催  
南天にオリオンの楯凍て傾ぐ  
霜の夜の星光寂と地を照らす  
たづね来し姉に切りける実千両  
枯野来てゆたかな潮の音に逢へり  
武者凧を空に嵌めある日和かな

杉浦典子

臘梅と同じ日向にゐる忌日  
枳は棘の木となり十二月

落葉蹴る音のやつぱり拗ねでゐる  
短日や火を赫赫と鷄雀る  
嵐電の昏きへ曲がる冬桜  
鴨啼いて夫に消灯時刻あり  
冬の蠅南京街に銅鑼鳴つて

浜口高子

電話ボックス灯れる水辺冬の虫  
曲るほど蜜柑明りの千早村  
木枯や海中に魚眠るころ  
一碧の宙を沈みし青鷹  
枯蓮の幾何学模様の静止かな  
旅戻りの四つ切白菜買ひにけり  
護摩壇のときに炎の立つ冬の虫

# 火星作品

山尾玉藻選

池底の寒さを言へり鯉浚ひ

宝塚山本耀子

池涸れて鷺のてんでの居りどころ

冬の雁河口に出でてみだれなし

湯音かすか夫に渡せる柚子袋

鴨つるむ羽音夕べを早めたる

空を行く朴の落葉の紛れなし

明石戸栗末廣

水の上を風さかのぼる枯野かな

年寄に用あるごとく笹鳴ける

抽斗のつつかへしまま冬の虫

初しぐれどんぐり山の匂ひけり

タクシーを帰して枯野人となる

宝塚蘭定かず子

簀へ鯉を追ひ込む愛宕しぐれかな

鯉揚げの舟風花を戻りきし



臨海は灯をふんだんにクリスマス  
干上がりし池をめぐれる紙懐炉  
すでに床敷かれてありし枯木宿  
鯉揚げて来たるリヤカー時雨くる  
障子しめ句会となりぬ石鼎忌  
初雪に白鳥の白汚れけり  
夜焚火や年守る尻の入れかはり  
天平の庇にたたむ時雨傘  
短日やみ顔まぢかく伎芸天  
女身仏を見し眼にふゆる雪螢  
軒先までならべ餅屋の鏡餅  
年詰まる砂洲に靴跡タイヤ跡  
九品寺や日あたる方に笹子ゐる  
淡海かな祭のやうに蘆枯れし  
床下に色鯉をひく冬構

大和郡山城

孝子

八幡丸山  
照子

神戸深澤  
鱻

古暦月のよはひの身に添へり  
義士の日の海へ逸れゆく赤穂線

# 選のあとに

山尾 玉藻

ろが投影された表現である。同時発表作へ池涸れて鷺のてんでの居りどころ、池底のあちらこちらで小魚をつつく鷺が見られたが、真つ白の姿は寒さを一段と募らせていた。「てんでの居りどころ」とは的確な切り取りであり、この言葉のひびきも誠に寒々しい。

水の上を風さかのぼる枯野かな 戸栗 末廣

見渡す限りものさびしい枯野が広がる中、日当る一筋の川が見える。その川面を風が細波を立てて遡ってゆくのだろう。きらきらと輝く川筋が拠りどころとなって、寒々とした冬枯れの景に生氣が蘇っていくかのようである。客観的な詠みぶりの中、そのような作者のこころの動きが感じられる。

鯉揚げの舟 風花を戻りきし 蘭定かず子

泥水から大鯉を揚げた舟が「風化」の奥からゆっくりとこちらへ現れる景である。「鯉揚げの舟」ならば泥まみれで寒々と傾いていたかも知れない。しかし「風花」の中に浮かび来るそれは、思いもよらず美しい景として作者の眼に映ったのである。はっと息を呑む作者が見えるようだ。(以下略)

旧臘、仲間たちと京都北区の広沢池の鯉揚げを吟行した。参加者の殆どが鯉揚げは初体験であり、愛宕嵐も勢いを殺がれたのではないかと思うほどの旺盛な好奇心を發揮し合った。何にでも嬉々として面白がる仲間たちを眺めながら、「俳人はこうでなくてはいけない」と私は妙に納得していた。私の期待通り、今月の投句の中で鯉揚げを題材にした作品に優れたものが多かった。しかも、その多くは吟行当日後に十分に練りこまれ研ぎすまされたものであった。やはり、吟行ほど作句の大きな手段になるものはない。

池底の寒さを言へり鯉浚ひ 山本 耀子

その鯉揚げを詠んだ一句である。殆ど干上がった池の畦の高みから劳いの声をかけた作者に、池底で作業する人物が「寒いでー」とでも声を返したのだろう。「池底の寒さ」は高みより覗いた作者の実感であろうが、干された池底の深さを感じさせると共に、池底での作業の厳しさをひしと感じたここ

同人 I

小林成子

# 恒星圈

愛宕嶺の尾根うつくしき木守柿  
ランナーの息もどりくる浚ひ池  
夕映えの堤のながし蕪村の忌  
日曜の高麗橋の聖樹かな  
数へ日の水を打ちある母の家

木野本加寿江

城孝子

大仏の裏山に生れ冬わらび  
相宿の窓にきてゐる冬の鹿  
夫病んで虻のむらがる花八ツ手  
一言を願ふ観音風花す  
歳晩の天満橋にて迷ひけり

風邪引きの子の自転車に抜かれけり  
マフラーに綿虫の来る河内かな  
十二月天理の駅のおざぶとん  
ポインセチア夫のいよいよ無口なり  
田の鶴の一步一步の寒かりし

河崎尚子

白数康弘

雪雲や秤の鯉の大跳ねす  
洗はれし蕪よ日野菜よ嵯峨野霽る  
帰るさは嵯峨野の蕪みな提ぐる  
鯉揚げの泥に竹笠の大しづく  
鯉揚げて来し夜の爛を熱うせよ

梅が香に男誘はれぬたりけり  
流れにはさからはずをり春の鴨  
ポケットをはみだしてゐる種袋  
げんげ咲くとなりの次の田もげんげ  
海神を祀りし祠地虫出づ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

枯蠶 螂 枯蠶 螂 に鎌 あぐる  
植物園の出口を 探す 冬帽子  
蓑虫や歩いてをればあたたかし  
銭湯に富士の絵をみて翁の忌

田中文治

煮凝や月のあかりの台所  
金堂のほかは暮れきし年の市  
標識の雪に埋もるる夕鴉  
人影に泥ざわめける池 浚

川端俊雄

数へ日やさしづめ用のなき靴  
木の洞に木菟の眼のある聖夜祭  
父の座に父なき月日餅飾る  
除夜の鐘ひとつは山の深きより

山口美貴子

鯉揚げの鯉に人寄る寒さかな  
枯葦へ入るる足跡出づる足跡  
池普請罅の間に動くもの  
大年の盥の鯉の匂ひけり

奥田順子

柝の音の六角麩屋町年詰まる  
目な尻に石臼まはる蕎麦湯かな  
異国語の銀座にまぎれ風邪心地  
鮫鱗の歯ばかりとなり吊られをり

西畑敦子

猪鍋や笑ひ上戸の人のゐて  
障子張り替へてありけり夜這口  
数へ日の護持費払ひに行くところ  
海亀の甲羅洗うて年つまる

藤田素子

裸木に地面掘る音ひびきをり  
数へ日の門扉のペンキ匂ひけり  
膝頭ふたつ浮かばせ冬至の湯  
年の夜の体のてつぺんから洗ふ